

## はじめに

江戸後期、関東の農村は人口が減少し荒廃していた。荒れた農村の復興を指導した人物が二宮尊徳と大原幽学である。時代は二人の指導者を必要とした。支配階級の武士は幕府・大名・藩士とも農民の年貢に頼る米経済が基本であった。平和な時代となり、商品は全国を駆け巡り、お金がお金を生み、富める者はより豊かになる貨幣経済が浸透する。商人の力は増大する一方で、武士に貨幣経済の進んだ関東の農村を復興させる力はなかった。

幽学の指導した村々は、千葉県北東部成田から銚子にかけてである。江戸へ直結する物流の大動脈利根川と、豊漁のイワシでにぎわう銚子から九十九里浜に挟まれた地域である。イワシは最高の肥料干鰯としめ粕(油粕)の原料で、大量輸送手段は船のみであった。物も金も動き産業は拡大する。同時に遊興が流行り、村々は荒廃する。

とくに天保の飢饉が襲うと、農村の疲弊はいっそう

進む。大地主も生まれるが、小作人に転落したり、つぶれる農家も発生する。村で生活できなければ、放浪の旅に出るかしかない。河岸で低賃金労働がみつからなければ、物ごいや博徒に転落し女性は身売りまで行われた。

銚子の五郎蔵・飯岡の助五郎・笹川の繁蔵らは没落した農民を吸収して勢力をのばす。利根川上流の国定忠治、大前田栄五郎を含め、利根川筋は東海道と並ぶ博徒の二大発生地となる。五郎蔵や助五郎らは十手取縄を預かる。お上の手先でありながら同時に博徒で庶民から嫌われた。とばくは江戸時代にはじまり、また取り締まりを目的に移動警察・関東取締出役も江戸後期に創設される。

人口が減少し、博徒がはびこる荒れた農村をみかね、大原幽学は歴史の舞台に登場する。幽学は合理的できめこまかな指導を行う。耕地整理を含む農業技術の改良、先祖株組合(協同組合)の結成、共同購入、生活改善、民主的会議の実践、子供や女性の教育まで指導する。村の外に出たこともない、教育を受けたこともない女性に優しく講義する。子供教育の徹底のため性

理学校まで創立する。

幽学は武士に生まれ、放浪の旅に学ぶ。最後は農民に囲まれ、六二歳の人生を閉じた。封建制の世、分相応や忠孝を言葉にして武士を理想化する。個々の指導法を検討すると、画期的、合理的な指導で反封建的な点が多い。今も幽学の教えは現代に生きる。幽学の真価が人間教育、生涯教育にあったからだろう。幽学は農村復興の指導者と評価されているが、それ以上に教育者として高く評価したい。

幽学はどん底の不幸に陥っても、夢をつかもうと強く願いつづけた。努力と工夫で夢がかなうことを幽学の生涯は証明する。厳しい封建制の時代、自力で農村復興を成功させ、理想社会をめざした。

幽学の理想と実践から、考え方や復興のアイデアを学ぼう。文化・自然・産業など、時代背景を織りませ、房総が復興する様子を考えたい。よそ者の幽学は一人でゼロから始めた。政治力もお金がなくても、村々の復興や人材教育に成功する。幽学の教育や平等の理想は現代に警鐘を鳴らす。

◎ もくじ ◎

はじめに 1

■第一章 遊歴から社会教育

- 突然の勘当 6
- 幽学の少年時代 7
- 放浪の生活 9
- 師との出会い 10
- 社会教育を決断 12
- 木曾から信州へ 13
- 信州上田で開講 13
- 活動の禁止 15

■第二章 幽学のみた房総

- 江戸から房総へ 16
- 幽学の時代の房総 17
- 米はイワシで作る 18
- 無法天保水滸伝の世界 19
- 利根川水運の賑わい 21
- 関東取締出役の設立 22
- 房総で遊歴開始 24

■第三章 性学の実践

- 千葉県北東部を巡回 25
- 道友（門人）の獲得 26
- 厳粛な神文式 27
- 性学の思想とは 29
- 教義対象者の変更 31
- 房総退去宣言 32
- 西上宣言の意図 33
- 禁酒を決意 34
- 幽学活動の地 34
- 学頭・医師本多元俊 35
- 長部定住へ 36

■第四章 農村復興の成功

- 先祖株組合の結成 38
- 長部村先祖株組合の発展 39
- スポンサー林兵衛 41
- 民主的な会議 43
- 耕地整理と交換分合 45
- 住居の分散移転 46
- 宿内理想村の建設 47
- 年間農作業計画 48
- 性学植の実践 50
- 自給肥料の奨励 51
- 干鯛の禁止 52

共同購入組合 52  
領主の性学表彰 53

## 第五章 目標は平等社会と人づくり

男子性学日 55  
女子教育の奨励 56  
結婚について 58  
換子教育の実践 59  
子供教育の重視 61  
性理学校の開校 62  
子供教育は家庭から 63  
生活改善運動 65  
胃に優しい「性学もち」 66  
人間改革をめざす 67  
子孫繁栄の法とは 68  
平等な社会を模索 69  
現実的な分相応論 71  
改心楼の建設 73

## 第六章 改心楼乱入事件と幽学の自殺

改心楼乱入事件 74  
取り調べ前哨戦 76  
関東取締出役の審理 77  
幽学の身分を認定 79  
幽学と高松家 81

彦七郎弟説の崩壊 82  
意気高く裁判を開始 82  
だから裁判 84

裁判の実施を嘆願 85

裁判費用にあえぐ 86

性学解体と評価の判決 88

高松家で謹慎 90

長部に帰る 91

自殺の決行 93

幽学の遺書 94

## 第七章 幽学亡き後の性学

二代目教主遠藤良左衛門 97

教導施設の建設 98

丹精 99

の強化 99

明治政府の弾圧 100

二代目教主良左衛門の死 102

三代目教主石毛源五郎 103

対立の激化 104

三代目教主石毛の追放 105

二宮尊徳と幽学 106

大原幽学記念館の開設 107

あとがき 108

# 第一章 遊歴から社会教育

## 突然の勘当

徳川御三家筆頭、尾張藩六二万石のご城下を、一八歳の若者が重い足どりで歩いている。若者は勘当されたばかり、後の大原幽学である。伊勢神宮に次ぐ由緒の熱田神宮をめざした。熱田神宮は三種の神器の一つ草薙の剣をご神体に、古くから「あつたさま」と親しまれる。

幽学は抑え切れない不安と怒りが渦を巻く。突然家を放り出されて、考える余裕も選択の余地もない。父のいう熱田神宮の神官田島主膳を頼るしかない。幽学は一八歳にして、生家を出される事件を引き起こした。あるいは巻き込まれた。どんな事情があったかは実証されていない。ただ道友（門人）には次のように伝え

られる。

文化一一年（一八一四）三月、幽学が外出したおり、酒に酔っていた尾張藩の剣道指南役とすれ違う。お供の者が刀のさやが触れてしまう。師範は「無礼者、武士の魂を汚すのか」と怒りだし収まらない。幽学もいっしょに「平にお許しを願います」と頭を下げる。しかし、師範は許さず刀を抜き、幽学のお供に「真剣で立ち合え」とせまる。若い幽学はもう引き下がらない。幽学がお供の代わりに果たし合い、切り倒す結果となる。

あわてて家に帰り、「やむなく剣道指南役を切りました」と幽学は父に報告する。私闘は禁止である。指南役を切ることは重大な事件で、藩の体面を著しく傷つける。いさぎよく腹を切ろうとする幽学を、「早ま

るな」と父は諫める。「死ぬ覚悟があれば、この世に生きて、どんなことでもできる」とにかく生きてほしいと親の情愛でさどす。

江戸時代、刑罰は連座制で厳しい。子供が罪に問われることは一家存亡の危機となる。その日のうちに父は幽学を勤当し家を追い出す。肉親の愛情を断ち切り、縁を切る以外に家族を守る道がない。

文化一一年（一八一四）三月二三日、数え年の一八歳で、幽学は先の見えない放浪生活に入る。永遠の別れに父は武士の誇りを捨てないようにさとし、三力条の訓戒を与える。

武士たるもの、みだりに身を捨てない。  
他国の君主に仕うることをしない。

民家に子孫を残さない。

つまりわが子幽学におだな死に方をしないで生きてほしいが、仕官せず、町屋に婿入りなどするなという坊さんや仙人のような生活しなくなる。言い伝えては三力条のほかに、「生家を決して明かしてはならぬ」と繰り返して注意した。そして河内守助国の大小の刀、葬儀代の三両を手渡した。

## 幽学の少年時代

幽学は江戸末期で、それほど古い人物でない。しかし、出生は解明できず謎に包まれたままである。寛政九年（一七九七）三月一七日、幽学は尾張藩の重臣大道寺玄蕃三五〇〇石の次男に生まれた、と道友（門人）の間で語られてきた。幽学は号で、幼名を才次郎、通称を左門と伝えられる。

### 幽学亡き後、道を

友たちは師の出身を調査している。

安政六年（一八五九）と明治六年（一八七三）の二回

にわたり、迷うことなく名古屋の大道寺家を訪問している。大道寺家を幽学の生家と考え、詳しいいきさ



父から譲られた河内守助国の大小  
(大原幽学記念館所蔵)

つを説明する。大道寺家は次のように答える。

「その年間に外出せる者あり、果たしてしかるか。大  
小(刀)を実際に見ないと確答致しかねる」

河内守助国の刀は高松家にあり、持参できない。

幽学の生まれは解明できなかった。だが総合的に  
状 況判断し、道友たちは大道寺家の菩提寺万松寺で、  
大法会(追善供養)を開き、幽学の墓石を建立する。

大道寺家も、万松寺もそれを認めている。

名古屋城の武家屋敷は、東から南側に多く配置され  
ている。城の南側三之丸、現在の中区三の丸に重臣の  
屋敷があった。現代の名古屋高等裁判所・愛知県警  
本部・名古屋市役所・愛知県庁・愛知県図書館・新聞  
社など官庁街となっている。大道寺家は現在の愛知県  
図書館にあった。

幽学は武士を強く意識して生き、武士として亡くな  
る。この事実と道友たちが書き残した「聞書集」をみ  
よう。「聞書集」は幽学の言行録で、「義論集」は道友  
との問答集である。二つとも幽学の行動や教えをまと  
める。幽学と道友がいきいきと描かれ、人間としての  
生き方を追い求める。

「先生(幽学)ご幼少の御時、朝四時に起きて、六時  
まで書物を読み、お城の太鼓を聞くと、自分の部屋へ  
行きて茶を一杯飲み、剣術の支度をして稽古場へ出る。  
動けなくなるほどたたかいた、それより帰り湯に入る。  
それから朝御膳なり。朝飯を食べているうちに、馬の  
支度をしてくる。それに乗りニキ口あまり離れた馬場  
まで行き、ほかの者に遅れることを恥と心得、暫く乗  
り帰ると中食となる。これより柔術の稽古となり、投  
げつ投げられつ稽古、その後弓の稽古なり。また湯に  
入り、茶の稽古、その間には手習いをする。十五歳と  
なると槍の稽古がはいいり、習い事みなそろうなり。稽



幽学生生の案内板  
(愛知県図書館敷地内)



古はげしき故、ひまといふものが少しもない」

朝早くから剣道・弓道・柔道・馬術などの武道、さらに茶道、読書、手習いときびしく教育されたと門人に話す。尾張藩上級武士の子弟の生活を体験したか、あるいは近くで見えていたかである。この記述によれば、一八歳までは恵まれた生活で、徹底した武士教育が行われていた。「親の教育のおかげで、何をしていても困るということがない」と語り、幽学は親に深く感謝をしている。

幼いときからの教育は重要で、武芸も教養も基礎はできていた。とくに剣道と弓道には自信があった。六〇歳当時に、身長一七〇センチ、体重六五キロと着物から推測される。江戸時代男性の平均身長は一五五センチとされているので、恵まれた体格であった。

## 放浪の生活

熱田神宮の神官田島主膳は京都の九条家へ転勤することが決まった。田島は親切にもいっしょに京都へ行くことを勧める。だが、腕に自信のある幽学は武芸で身を立てようとする。武芸者の修行は道場破りどうよ

うの危険な旅である。ケガはつきも、生命の保証がない。若く自信満々で、遠慮なく相手を打ちのめした。幽学は修行のつもりでも、反発や恨みをもってしまふ。幽学は武芸で生きる時代ではないと悟る。武芸者の道は数カ月で断念する。

文化十一年（一八一四）九月、幽学は京都九条家に転勤した田島主膳をふたたび頼る。結局、田島は足かけ三年もの居候を許した。幽学の生家と関係があり、幽学もすぐれた人物であったからだろう。田島が仕えた九条家は五摂家の一つで、尾張藩は息女が九条家や近衛家などに嫁ぎ深い関係があった。

伝統と文化の中心京都で幽学は生活をする。宮中の音曲や礼儀作法を習い、神道・儒学・大学・中庸・孝経などを学ぶ。また人相・和歌・俳句なども習う。京都で朱子学派の新井流易学を修める。占いは現代でも人気があり、易学は収入につながる。漂泊の方法や覚悟を身につけていく。

文政元年（一八一八）五月、幽学は弘法大師空海が開いた聖地高野山（和歌山県高野町）へ登る。深山の聖地には総本山金剛峯寺のほか、一〇〇あまりの子院があ